

先日のある日。矢本ひと・まち交流館。「むうぶ 秋・冬合併号」打ち合わせ会の席上、「NPOと音楽」というテーマでお任せするからこの面の原稿執筆を…」とお願いされてしまった。ちなみに広報委員になって初めて出席した打ち合わせ会である。元来こういう事を依頼されるとイヤとはいえない性格なため「自由に任せてもらえるなら…」とOKした。「まあ音楽ならなんとかなるな」そんな甘い考えをそのときは持っていた。

NPOだから広域性と団体とを絡ませなきゃなあ、そんな歌知っているかなあとラジオ石巻のCDライブラリーを片っ端から手にする。1枚2枚3枚…机上に積まれていくCD。違う、これも違う。やばいよ、今更「適当な曲がなかったから書けません」なんて言えないなあ。そんな時アウンサーの一人が番組でかけたのがBank Bandの『沿志奏逢』の中に入っている「糸」という曲だった。

あった！！歌ではないけどアーティストが取り組む新しいこと。これってNPOに近いんじゃないか…

皆さん「ap bank」ってご存知ですか？bank っことは銀行？いや普通の銀行じゃあないんです。「ap bank」は自然エネルギー、省エネルギー、環境に関する様々なプロジェクトに融資する非営利組織なんです。あくまでも融資です。補助金出す財団とかではありません。

このap bankを立ち上げたのがMr.Childrenの櫻井和寿、音楽プロデューサーの小林武史、そして世界の“SAKAMOTO”坂本龍一（教授）の3人。ただap bankはNPO法人じゃないんです。最近国が進める新しい法人形態、有限責任中間法人（ちなみにこの形態の団体に銀行振り込みを行うときウケンセキン…とかカナで入れるのが非常に面倒な上、途中で終わっちゃうってのが難点）という形なんです。

ap bankは市民の事業に融資しますが、形態はなんでもかまわないようです。個人、NPO法人、民間会社、生活協同組合などの形態であってもかまわず、「市民性」に関しては、その性格、人数、配当の有無、利益分配の実態などを総合的に検討し判断すること。残念ながら第一次融資は締め切られたのですが今後も活動は続けていくようです。そして櫻井と小林はBankBandを結成し『沿志奏逢』というアルバムを発表しました。もちろんap bankの活動の一環として。このアルバムに収録さ

れている曲は中島みゆき、井上陽水、浜田省吾、岡村靖幸ら、そしてヴェートベンの交響曲第9番・歓喜の歌のカヴァー。もしこのCDを手にする機会があったらライナーノーツに書かれてある櫻井や小林の言葉を

読んでいただきたい。彼らの思いそして音楽の果たす役割…そして彼らの歌に背中を押されるようにして掛け値なしに何かの活動に取り組む人たち。

そういえば先日1985年7月13日に行われたロックイベント「LIVE AIDO」のDVDが発売になった。チャリティ目的のこのイベントにはU2、スティング、ケニー・ロギンス他多くのアーティストが参加した。「LIVE AIDO」は前年のリスの『Do they know it's christmas /BandAid』、アメリカの『We Are The World/U.S.A. for Africa』が出発点となっているのだがこの超巨大イベントの形が現在の日本の

ap bankにつながっているのでは、いや発展形なのではないだろうか。

それはそのまま1985年に日本では無かったNPOという形態が現在これだけ多く誕生して、社会に、人々の生活に大きく関わっていることを考えると無関係ではないように感じる。

もしその活動の中でそれぞれの団体が自分たちのテーマ曲や支えになる歌を持っていたら素晴らしいんじゃないかな、などと考えてみた。いずれにしてもどんなときもみなさんの唇に歌があることを願ってこの辺でお別れを。いやあ柄にもなく硬い文章になってしまった。

参考サイト ap bank <http://www.apbank.jp>
LIVE AIDO <http://www.wmg.jp/liveaid/>
参考CD『沿志奏逢 / Bank Band』

編集後記

広報部会の開催が遅れ、秋冬合併号と相成りました。今回は、災害とNPOという切り口で紙面のトーンを作ってみました。次回はITとNPOというテーマに取り組む予定です。(珍しく次回の紙面構成まで決まっています)

ところで、いつもフットワークの悪い編集責任者である私の尻を叩き、取材やら原稿書きやら原稿の打ち込みやらをこなしてくれるのはK女史。「むうぶ」が世に出ることが出来るのは彼女のおかげです。この場を借りて心から感謝申し上げます。(S.O)

NPO論楽

～音楽に見るNPO～

とかく難しくなりがちなNPOの論議を、やさしく解きほぐしながら「論を楽しむ」コーナーです。

今回、『論楽』に華々しくデビューするのは…「皆さんよりは毎日音楽に囲まれている生活をしている。毎日何百曲が右の耳から左の耳へと通り過ぎていく。まあ音楽ならなんとかなるな。」と執筆を引き受けてくれたこの人！！

『ラジオいしのまき 清野恭弘さん』



いしのまきNPOセンター 人々が北上川の流に乗って新しい時代の始まりを予感し、協力し合いながら前進しようとする姿を小さな芽に見立てています。	育む 集う 結ぶ むうぶ	発行 特定非営利活動法人 いしのまきNPOセンター 連絡先 〒986-0832 宮城県石巻市泉町3丁目1-63 TEL/FAX 0225-23-0851 Eメール npo@i-port.ne.jp HPアドレス www.i-port.ne.jp/npo/	2004年 秋冬合併 第8号
	いしのまき NPO センター 専務理事 木村 正樹		

災害支援へのNPOの取組み

年末を印象づけるニュースに、今年の漢字というのがありました。今年は「災」の字が選ばれました、台風による風水害と大規模地震に見舞われた今年を象徴する漢字ではなかったでしょうか。ちょうど来年1月は「阪神淡路大震災」から10年を迎えます。私達が住む地域も、昨年の地震から1年が過ぎ、まだ復旧の途上にあるいま、NPOが災害支援へどう関わっていきけるのかを、考えてみたいと思います。

災害初動時における支援体制の構築

阪神・淡路大震災を契機として、ボランティアが被災地に駆けつけ、復興支援にあたる光景があたりまえのようになってきました。その際、現地でのボランティアの受け入れ体制がなく、せっかく遠方から支援に駆けつけてくれたボランティアを適切に現場へ派遣できなかつたり、支援を必要とする人のニーズに応えられなかつたりなど、コーディネート役の「ボランティアセンター」の役割がますます重要になってきています。昨年の宮城県北部連続地震の際も、複数の町の社会福祉協議会がその役割を担い、成果をあげています。その際にも神戸の震災支援組織のメンバーに直接現地で支援協力をしていただき、運営もスムーズにいきましました。今後は、災害時に、その地域で迅速にボランティアセンターを立上げることが出来るか、また、災害支援活動を目指すNPOと連携を取れるかが課題になると思います。



直下地震の爪痕が大きく残された無残な家屋

長期的な復旧支援への取組み

宮城県北部連続地震の際に、「阪神・淡路まちづくり支援機構」の事務局の方を、被災地に案内する機会がありました。支援機構とは、弁護士・司法書士・税理士・建築士・土地家屋調査士・不動産鑑定士の専門職能者が横断的に連携して、民と民との権利関係の調整支援をするために出来た組織です。当時の神戸の街は、地震と火災により多くの家屋が焼失し、地盤移動が各地で起こり、境界の復元や権利関係の確認など、行政や個々の専門家だけでは対処できない事例が多く発生しました。そのために民間の住宅復興が進まなかった反省を踏まえ、創られた組織です。彼らは

反省を踏まえ、災害が起きる前に専門家による支援組織を立上げようと、災害が起きれば、啓蒙を兼ねて被災地を訪問しています。幸い、この時の訪問をきっかけに宮城県弁護士会でも他組織との連携を視野に入れた活動が始まっていると聞きました。



大きく陥没した道路

日常的な防災支援組織のありかた

災害が起きる前から、それぞれの地域コミュニティにおいて自主防災組織の必要性が、今回ほど叫ばれたことはありません。特に昨年の宮城県や今年の新潟県などの災害時に、中山間地域における高齢者世帯での犠牲者を見るにつけ、社会的弱者に対する救援の必要性と難しさが浮き彫りにされました。日頃から地域のどこに社会的弱者（高齢者・障害者など）や情報弱者（在住外国人など）が住んでいるのかを確認し、災害時に他から応援に駆けつけてくれた専門的な支援者や支援機関に対する地域の情報を提供する担い手が必要になってきます。そのためにも地域において自主的に防災組織をつくる動きが出てきています。地域の高齢世帯の安否確認や、在住外国人との交流など、防災組織が日常的な活動を通して地域に根ざした組織になることが必要だと思えます。

「事前の備え」「事後の対応」「最中の情報」の3つの要素に対応した組織づくりが求められると思います。NPOが災害支援を行うにあたり、事前の備えとしての地域自主防災組織、事後の対応としての復興支援組織づくり、最中の災害情報の提供者としてのボランティアセンターづくりと、要素に応じた組織づくりや運営・情報管理など連携協力できる項目は多岐にわたります。地域社会とNPOとが共に災害に強いまちづくりを目指した活動が、これから求められる時代になってきています。

育む incubate 集う communicate 結ぶ network
 新しい時代の胎動をNPOがつくるという思いを込めて…

～子どもと親のための広域合併フォーラム～ 新市いしのまき、ジュニアミーティング 開催報告 副代表理事 木村 美保子

宮城県内のみならず、全国的に紆余曲折を経ながら進んでいる広域合併。わが町、石巻市もついに悲願の合併がこの春、1市6町で実現します。そこで、多くの子どもたちや市民に、合併の概要を知ってもらい、「新市

いしのまき」の今後の地域づくりに、若い世代の考え方や期待することを議論し、提案する場を持ちたいと考え、このミーティングを企画いたしました。

開催にあたり、実行委員（お世話役）とパネリストを、圏域の各中学・高校から生徒会役員を中心に選任。事前学習&説明会ならびに事前広報活動のお手伝いをお願いし、協働型で準備をすすめることが今回のねらいのひとつでありました。石巻文化センター大ホールを会場に行われた本番では会場設営はもちろん、受付・舞台準備・音響・司会進行、そしてパネリストなど、それぞれが役割を担い、「いまどき」の音楽やBGMを彼らの感覚で駆使しながらにぎやかに開会しました。

第1部は、現在、市や各町で発行している住民説明会資料やその他の情報をもとに、パワーポイントを使って広域合併についてプレゼンテーション。来場いただいた方々には「わかった」という感想を頂戴し、作成した当NPOセンター副代表チームも安堵の表情。

その後の第2部では、石巻を考える女性の会が主催した、地元小学生による「こどもいしのまき！わくわく体験隊」体験活動発表会。わくわく体験隊のこどもたちは、今年5月から7ヶ月かけて、1市6町全てを周り、目で見て感じたことを素直な言葉で発表してくれました。

そして、いよいよ第3部。土井喜美夫市長（今回は石巻地域広域合併協議会会長のお立場で）vs 中学生代表3名・高校生代表10名によるパネルディスカッション。コーディネーターの当センター理事、現役の教頭先生でもある男澤氏も江だく、パワフルな発言が盛りだくさんのパネル討論となりました。「中総体」の大会の枠組はどうなるの？「公務員の新規採用はあるの？」「雇用問題を解決するための具体策は？」身近で率直な内容が多く飛び交いました。

今回の事業を通して、強く感じたことは、私達のまちをつくっていく次世代の子ども達の「無限の可能性」です。彼らの力を地域づくりに活かしていくことこそ、新市「石巻市」の「新たな課題」であり、私達NPOに携わるものの「新たな挑戦」となるでしょう。この春の合併に向けて、いまいちど我々大人も足元の「力」を活かす手法を考える時期に来ているようです。

宮城県NPO青少年育成協働事業として 平成16年11月20日 石巻文化センターにて開催 主催：宮城県 企画：(特活)いしのまきNPOセンター 石巻を考える女性の会



中間支援センターのリーダー研修

講座2「信頼されるNPOとは？」 講座3「これからのNPO支援のあり方」 講師 川北 秀人 氏(人と組織と地球のための国際研究所 代表)

研修委員会 男澤 清勝

久しぶりに川北氏の声を聞いて、彼もパワーアップしているなと思いました。ニーズの確認、理解という点でのご指摘は「いしのまき」としても大きな課題であると感じました。加えて、「次の世代にどうつなげていけるか」という問題提起もありました。喜多方子ども劇場の例が示されましたが、我々としても「未来の組織図」を組織として作成していく必要があるような気がしました。後半では、個々による提案書の作成が行われましたが、ここでも「〇〇を〇〇にしたい」という提案の一連の流れのなかで、現状把握、原因分析の重要性、ニーズリサーチの大切さを指摘していただきました。リサーチの方法としての「かぞえる・くらべる・たずねる」を活かしてこそ、将来にむけての仮説(夢)が形になる気がしました。



作成した提案書を壁に掲示。互いに疑問や改善点を付箋で貼り付け、意見交換しました 平成16年10月16日 13:00~18:00 石巻文化センターにて開催

シリーズ 人が支えるNPO ⑧

くみちゃんのおじやましま〜す!!

今回はなんとなく優しい感じのするお名前の設計事務所「工作舎」さんを訪問しました。代表の今村茂さんは新潟中越地震でのボランティア活動から戻ってこられたばかり。どんなお話しが聞けるか楽しみです!

宮城県から建物診断ボランティアの要請を受けて集結した6名は、ほとんどが特定非営利活動法人広域石巻住宅改善センターと石巻建築設計事務所協会のメンバー。一行は宮城県建築士会石巻支部として10月29日、石巻を出发しておよそ6時間後の午後4時、被災地入りしました。要請を受けた翌日には出発という迅速な対応でした。

到着後は休むまもなく、伊藤正博さんと斎藤浩喜さんが宮城県代表として国交省と打ち合わせを開始。はやる気持ちを抑えての打ち合わせは、結果的にはとても重要な過程であることが分かり、刻一刻と変化する状況に対し落ち着いて判断できる心の余裕を与えてくれたようです。



事前打ち合わせは綿密におこなわれます

『ちょっと自慢していい?県からの要請を受けて行ったことになっているけど、実は、要請を受ける前から現地に行くことは決めていたんだよね』と語る今村さんからは、昨年の宮城県北部連続地震

において1週間にわたりボランティア活動をした実績を持つ団体のたくましが伝わってきました。

発を決めてから現地の受け入れ態勢が整うまでの間、率先して行なった事は電話やインターネットで現地の被災状況を把握することでした。持ち前の行動力に任せきりにせず、まずは状況確認をしっかりと行なったことに、熱い気持ちの中にも冷静さを併せ持つ「成熟した団体の実力」を感じました。

昨年の震災時同様、今回も「建物応急診断士」として被災建物の危険度を「安全」「要注意」「危険」の3段階に識別する作業を実施。これは2次災害防止が目的で、石巻支部の6名は2日間で68件を診断。担当した長岡市亀崎地区は、山側の被害が少なく田んぼ側が大きい、と状況がはっきり二分したそうです。建物が被災している様子を目の当たりにして、災害に対してお年寄りが抱くであろう恐怖などこれまで想像したことが無かった事にメンバーそれぞれが気づいたそうです。また、被災現場での活動を通して、専門家はいかにひとりよがり強いかを実感した結果、『今

後はより一層、実際に生活する人の立場になって設計する住宅を提供しよう、という気持ちになった』と今村さんは語りました。

今村さんの言葉でとても印象に残ったものがあります。『ボランティアは自己完結であって欲しい!』その一言は全国各地から大挙して押寄せるボランティアを暫時受け入れるボランティアセンターの実情を表しているようにも思われました。真摯なボランティアが大勢を占める一方、自分のやりたい仕事以外は積極的に



こんな感じで作業はすすめられます

関わろうとしないボランティアもいると聞きます。悪気はないのですが、「助けになりたくて」行動を起こした時の尊い気持ちを帰るまで持続できれば、もしかして職人気質のスーパーボランティアになれるのでは!と単純な私はイメージを膨らませるのでした。自分が被災地ボランティアになるときは、食事や水はもちろん、寝る場所も自分で確保出来るくらいの逞しさを持って臨みたいと痛感した言葉でした。

ここで、広域石巻住宅改善センターと石巻建築設計事務所協会をちょっとご紹介。普段は相談業務が主で一見ホワイトカラーなジェントルマン集団ですが、やる時はやる実働軍団。高齢化が加速する社会の中で、住宅のバリアフリー化やより生活しやすい住いの提案、万が一に備えた耐震診断をお手伝いすることを目的に設立された建物に関するプロ集団なのです。



現地の方とのコミュニケーションも大事な作業工程です

被災地で培った経験や建築の専門家としての知識を様々な場で社会に還元していきたいと意欲をみせる今村さん、取材協力ありがとうございました! (今号の「むうぶ」1ページと3ページで使用した震災の写真もご提供いただきました)

特定非営利活動法人いしのまき広域住宅改善センター 石巻建築設計事務所協会の活動に興味のある方は、石巻市NPO支援オフィスまでお問合せください。